

兄ちゃんの手

青森県 大鰐町立大鰐小学校 三年

長利 菜々美

部活の練習から帰ると、ドアを開けながら大きな声で、兄ちゃんが言います。中学二年生です。どろだらけのユニホーム、あせくさいまっ黒な顔で

「子ぶた、ただいまあ。元気にしてだが。」
わたしは、

(菜々美という、めんこい名前だぞ。なんで子ぶたなんだ。) と思いつながら、小さい声で返事をします。

お父さんと、お母さんは、二人で美よういんをやっています。仕事が終わるとそのまま、兄ちゃんをむかえに行くので、じつちゃん、ばつちゃん、わたしの三人でごはんを食べます。夜おそく、兄ちゃんがわらいながら、お父さん、お母さんと帰ってくる、

(いいなあ、兄ちゃんは。いつもいっしょで。) と、ちよつとにくらしく思いました。

わたしが急にねつを出してしまつた時、
(お母さん、早く帰って来ないかなあ。)

時計を何度も見ながら待っていると、やつと帰ってきた声がかいてきました。いつものように、兄ちゃんが楽しそうにそばに来て、

「子ぶた、ただいま。ねつ出たんだべ。どれどれ。」

と、わたしのおでこに手をのせました。顔がポーツとほつて体もだるいのに、兄ちゃんに思いつき顔をそむけて

「いいんだつてもう。」
と、手をはらいのけてしまいました。

「早く、ねつ下がれよ、子ぶた。」

しずかに言った兄ちゃんの顔が、ちよつとさびしそうに見えました。次の日、ねつがすつかり下がったわたしは、ひさしぶりにアルバムを見ました。たん生からゆつくり見ていると、兄ちゃんが小さいスプーンを持って一生けん命わたしにごはんを食べさせているしゃ真を見つめました。あつくないように口をフーツフーツさせているようです。ピニールプールでは、ころばないように兄ちゃんの手がいつもプールの中にあります。今まで気がつかなかったけど、兄ちゃんに守られているようなしや真ばかりでした。アルバムを見た後、学校に行く時も帰り道もぎゅつとつないでくれた兄ちゃんの手が、かたくて、温つたかくて、やさしかった事などいっばい思い出しました。

(子ぶたは、バカにしている言葉なんかじゃないんだ。) 今までのもやもやした気持ちさがスーツとどこかに消えていきました。

その夜は、いつもとちがつて

「子ぶた、子ぶた、ただいまでござる。」

と、おどりながら帰って来た兄ちゃんに、
「おつかれでござる、こくろうでござる。」

とおしりをふつて返事をしました。

(兄ちゃんのやさしい手、わすれないよ。子ぶたもがんばるから、兄ちゃんもフリースフリース。)